
昔の男

はとまめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昔の男

【Nコード】

N1444Y

【作者名】

はとまめ

【あらすじ】

赤髪海賊団が次に選んだ冒険の地は、ウェストブルーの外れにある無人島。その島にあると言われる秘宝を求め、航海を進める。そんな中、船内ではその島にまつわる噂が流れていた。船長が昔冒険したことがある島だというのである。シャンクスの真意もわからぬまま、一同は上陸していくのだった。

はじまり（前書き）

若かりし頃、仲間と一緒にこんな冒険をしてたらいいな　という
想いから、書き上げた妄想小説第1弾です。

世界観とかは、一応原作から外れないよう頑張ってます。
立ち位置としては四皇ですが、仲間といる時は少し抜けてて気さく
なお頭だと思っています。↑この辺とか妄想。

おそらく好みが別れるかと思います。ダメだなと思ったらすぐ戻っ
て、見なかったことにして下さい。m（＿）＿m

はじまり

「だいぶ気候が安定してきましたね」

雲の流れが穏やかだ、と頭上に広がる青空を航海士は目を細めながら見上げる。数時間前の時化が嘘の様な天気、甲板で作業をしている水夫たちから安堵の溜息が漏れる。

数日前に港を出港し、コンパスの指針に沿って航海を続けているのは、髑髏の左目に3本傷の海賊旗を掲げる赤髪海賊団だ。

目指すはウェストブルーの外れにある、諸島の1つ。事前調査にてそこには秘宝が埋まっていると判明したからだ。

「早く島に着かねーかな」

「そうだな、そろそろ船旅も飽きたし、早く冒険したいよ」

「今回のお宝は凄いで。さっきお頭から聞いたんだが、昔あのお頭が狙ってなお断念せざるを得なかったお宝だって」

「ああ、お頭の部屋から出てきたんだろ？ 例のお宝の地図」

ガラクタで溢れ返っている自室を掃除するように、と副船長から生活指導が下り、数人のお目付け役の下しぶしぶシャンクスが船長室の物を漁っていた時発見されたものだ。

これは宝の地図だ、間違いない！そう言い張るシャンクスの剣幕に負けて今度はベックマンが嫌々仕事の合間を縫って調査を始めた。

最初は仏長面だったベックマンも、地図を調べるうちにどんどん難しい顔になっていき、その結果脈有りと判断されて現在に至る。

「でもな、地図の出所があのお船長室だろ。眉唾もんって可能性の方が高くなえか？」

「ああ、副長も苦い顔してたよ。だいたい、あの人に狙われて無事だったお宝だなんて想像がつかねえな」

うんうん、と船員一同が深く肯く。

三度の飯よりお宝探しが好物だ、と豪語する船長の気の趣くまま、やれ密林やら海底やらと喜んで飛び込むお頭の執念に何度も舌を巻

いた経験を思い出す。

そんな困った船長さんではあるが、何故か嫌だと言わせないあの雰囲気は、世間では一体どういう名前が付けられているのだろう。一瞬考え込んでみたが、すぐに頭を振って考えるのを諦める。

「まあ、難しいことを考えるのは幹部の仕事さ。俺たちはさっさと甲板掃除終わらしちまおうぜ」

人にはそれぞれ向き不向きがある。それを身を持って知っている男たちはそれつきり無駄話を止めると、急ピッチでモツブ掛けに取り組んだ。

地平線の向こうでは太陽が傾きかけている。船内の食堂からは、バターの匂いと香辛料の香りが漂い始めていた。今夜の夕食は何が出るのだろうか。皆の関心の対象が食へと移っていく頃、青い海は茜色に染まり、平和な一日が終わりを告げたのだった。

「お宝探しに興味はないか？」

まだ日が沈み切らない時間帯、港の場末の酒屋で独り地酒を片っ端からあけていたところ、男に声をかけられた。突然のことに人違いかな、と口に運ぼうとしたジョッキをピタリと止めて周りを見回す。だが、どうやら話しかけられたのは他でもないオレの様だ。

「へえ、お宝探しか。そりゃ、大好物だよ」

「そりゃよかった。どうだ？ 話を聞くだけでも損じゃない」

「いいけどさ、何でオレなんだ？」

くいつと、飲み掛けていた酒を味わい、ほろ酔い気分のままなんとはなしに男の話に耳を傾ける。

夕刻とはいえ、店内は一仕事を終えた漁師や水夫で賑わっていた。どの男たちも、腕は勿論背中や足腰に至るまで厚い筋肉で覆われ、

どんな重労働も難なくこなす姿が容易に想像できる。

「その日焼けした浅黒い肌に目の上の切り傷。あんた、船乗りだろ？　しかも、人様に顔向けできない部類の」

「なるほどな。で、本当にそれだけ？」

「……上手く言葉に出来ないんだが、オレと同じ目をしている、そう感じたんだ。ギリギリに輝いて、常に刺激に飢えている」

どん、と空になった分厚いガラスのジョッキをテーブルの上に置く。そこでようやくシャンクスは、話かけてきた男の姿をまじまじと見た。

目の前にいたのは青年だった。年はシャンクスより少し上だろうか。この酒場にいる連中程筋肉質ではないが、背は高く体はがっしりとしていて丈夫そうだ。腰には腕の長さと同じくらいのサーベルを差している。

人が良さそうな笑顔を浮かべているが、その瞳の奥に抑えきれない欲望が滲み出ているのを見つけると、シャンクスは声を立てず小さく笑った。

これは、面白そうだ。

「まあ、座れよ」

自分の隣の椅子を引いて男を招き入れる。

「ああ、ようやく興味を持ってくれたみたいだな」

男は嬉しそうに席に着くと、酒場の亭主に自分とシャンクスの分の酒とつまみを注文する。すると、テーブルには先ほどまでシャンクスが飲んでいた酒が1本と男が注文した酒、そしてこの港の郷土料理と思しき小皿がいくつか運ばれてきた。

「さあ、好きなだけ飲んでくれ」

「おお、うまそうだ。でもよ、最初に言っておくが俺は……」

「ああ、海賊だろう？」

男はシャンクスの言葉を軽く手を上げて制し、小さく囁いた。シャンクスもそれに小さく肯く。

ここ数日仲間の勧誘もしないで大人しくしているのには、理由があ

った。

近くにかんりの規模の海軍駐屯地があり、この港町にもよく海兵の姿を見かける。単身で行動している今は下手に海賊だと知られるのは得策ではない。こそこ隠れるのは、海軍が怖くて海賊がやれるか、というシャンクスの主義主張に反する忌忌しき事態であつたが、背に腹は代えられない。

「知つててオレに取引を持ちかけるなんて、大胆なんだか命知らずなんだか」

どうなんだよ、と目線で問えば、男は片眉をあげて応える。

「実をいうと、あんたのことを初めて見つけたのは3日前なんだ」

男はシャンクスが先ほどまで飲んでいたジョッキに酒を注ぎ、自身は手酌で酒を飲みながら話を続ける。

「真つ赤な髪に、左目に3本傷がある男がいるつて噂も広がつてた。最初は興味本位だったんだが、すぐに考えを変えた」

「なんだよ、大人しくしてても目立つならこそこそする意味ねーじやんか」

今度は変装でもしなきゃ駄目かな、とぶつぶつ言うシャンクスに氣にすることもなく男は話し続ける。

「まだ若いが、腕が立つ。度胸もあるし、何より危険なんて恐れない男だ。今回の山は、こいつと組めば成功する」

「あはは、そんなに褒めたって所詮俺はお尋ね者だ。それだけで信用していいのかよ？」

「そいつは、…勿論これから確かめるんだよ」

お前もそのつもりだろ、と目線でシャンクスに伝える。

ふむ、と考え込みながら酒を口に運んだ。

悪そうな男ではない。ここには別の用事で来たが、急ぐ程のことでもない。

そして何より、ここへ来てから退屈してたのだ。そこへ振って沸いてきたお宝探しの情報。これは、首を突っ込まない手はない。

「いいぜ、話を聞かせて貰うよ。…っと、オレはシャンクス、あん

たは？」

「ザナンザだ。フリーでトレンジャーハンターをしている。よろしくな、シャンクス」

その日の夜は、上陸を明日に控え、船内の食堂で前祝という名目の宴が催されていた。

船員の皆がまだ見ぬ財宝に思いを馳せ、酒の肴とし大いに盛り上がっていた。

そんな食堂の片隅に置かれたテーブルで、今宵の幹部会議は行われている。とは言っても、ジョッキ片手に行う議論で有益な結論など出るはずもない。

「本当に、この辺は海流がおかしいですね」

「ああ、俺も昔あの島へ行くには苦労したんだよ。お前らも見ただろ、あの渦潮の数、海流の速さ！」

「こーんなに凄いんだぜ、と両腕をぶんぶん振り回してその凄さをアピールするシャンクス。興奮がさめないのか、テーブルに乗り出さん勢いで話し続ける船長の横で、船員が鍛えられた腕を組み低く唸る。

「ああ、ばやばやしてたらすぐに転覆しちまうな。潮の流れも全く予測不可能」

船長と一緒に上陸目的の島の周りを取り囲む巨大な渦潮や海流を目にした幹部は、首を捻りうなだれる。

まるで島を外敵から守る自然の要塞の様な海域は、上陸航路を計算している航海士達の前で数時間おきに方向も早さも一瞬の内に変化してみせた。これには、戦闘となれば敵なしの赤髪海賊団の船員たちも、島を目前に指を咥えるしかなかった。

「てか、お頭。あの島に行ったことあるんですか？」

「おお、昔な。皆がいなくて暇だったもんだから、ちよつくら散歩がてら宝探しをしようかって思ってたよ！」

「……お頭、また黙っていなくなっただんでしょ？」

赤髪海賊団船長の特技もとい趣味は、勝手に冒険に行くことである。

「この海域で？ 初耳だな。いったい何年前の話だよ」

長年の付き合いである幹部一同も、この島のある周辺へは初めて来たものが殆どのようだ。声を揃えて初耳だ、と言い合っている傍でシャンクスはいきなり立ち上がる。

「よー、ベック！遅かったな！」

ぶんぶんと腕を振りながら大声を上げるシャンクスの声に皆の視線が食堂の入り口へと集まる。そこには、黒髪を後ろで束ねタバコを啜えた我らが副船長が立っていた。仕事で目を酷使したのか、片手で眉間を揉みながら幹部たちが集まるテーブルへとゆっくり近づいてくる。

「お、副長。仕事お疲れさん」

ベックマンは、部下の労いの言葉に片手を挙げて答えると、啜えたタバコに火をつけ紫煙をふかしながらシャンクス隣に座った。すぐさま新しいグラスが船員によって用意されるが、酔っ払った船長が奪取しベックマンのグラスに勢いよく氷と酒が並々と注ぐ。がしやばしや、と中身がテーブルにこぼれるのはご愛嬌だ。

「どうだ、なんとかなりそうか？」

「ああ。この辺の複雑な海流の流れを計算するに手間取ったが、明日は問題なく上陸できる」

「さすが俺の副船長、男前だなあ」

乾杯、とベックマンのグラスに自分のグラスをぶつけ、豪快に酒を呷る。

上陸を明日に控えて興奮しているのは皆同じだったが、それを鑑みても今夜はペースが速い。

「お頭、飲みすぎじゃないか」

すっかりできあがった船長を、ベックマンは眉をひそめ叱咤するが、酔っ払いはそんな程度では言うことは聞かない。

「馬鹿やろー、俺の肝臓はこれぐらいじゃ、なんてことないんだよ」

「二日酔いになっても、俺は知らんぞ」

「おう、任せとけ！」

ああ、この笑顔がくせものなんだよな。

シャンクスはけたけたと笑いながら酒ビン片手に立ち上がる。若い衆らをからかいに行くつもりなのだろう。ふらふらと鼻歌まじりの千鳥足で大テーブルの方へ歩いていくお頭が無事席に着くのを見届けると、皆顔を寄せて笑った。

「まあ酒が残ったとしても、上陸する頃にはけろっとして甲板にやつてくるつしょ」

「違ういな」

シャンクスが席に着いた所から歓声がどつと上がったのが聞こえてくる。皆の中心で楽しく飲んでいるお頭の様子が目に浮かぶ。

「さて。うるさいのもいなくなつたし、偶にはゆっくり酒を楽しむか」

半分ほどの長さになったタバコの火を灰皿で揉み消すと、ベックマンは船長お手製の酒をゆっくりと味わう。

「副長は知ってるんですか？ お頭が行方不明になつたつう話」突然振られた話題に、一瞬顔が止まったがすぐに話の流れを推測すると、会話に参加する。

「いや。心当たりは数え切れない程あるが、俺はこの海域に来たのは初めてだ」

「それにお頭は行方不明の天才だからよ。一々覚えてらんねーもんな」

海賊団を結成してから早十数年。勝手にいなくなつては厄介ごとを拾ってくるお頭を思い出し、苦笑いを浮かべるとその思い出にそつと蓋をする。

思い出したくないものを思い出してしまわないようにするには、酒

で酔ってしまうのが一番だ。お互いの苦勞を察し、酒盛りを再開する幹部一同。その背中には、心なしか哀愁が漂っているように見え、若い衆らは心の中でそつとエールを送った。

「しかし、副長も知らないとなると、この話は迷宮入りってことかあ」

「オレ、その話知ってるよ」
「ルウさん」

今まで酒も飲まずに骨付き肉をほうばっていた同僚が、会話に加わってきたのに少し驚きながらもルウの話に耳を傾むける

「あれは、海賊団を結成して数ヶ月後のことだ。お頭を港町に残して皆で買い物に行ったんだが、帰ってきたら行方不明になってたんだよ」

ああ、なんてお頭らしい。

「皆大慌てして、お頭の行方を捜したんだが、当の本人は2日後にけるつとして帰ってきた。行方不明は初めてで、あの時は本当に疲れたよ」

心配で肉が普段の半分しか喉を通らなかった、と食べかけの肉を見つめながらしみじみとその時の心情を告白するルウ。

「へ、へえ、そりやあ・・・」

大変だったんですね、と言っているのか判断しかねる発言に一同お茶を濁す。

「まあ、その失踪事件のことはわかったけどよ、なんか納得できないよな」

「結局、昔お頭はあの島を探検したんだろ？　だったら、何でまたこの島に行こうだなんて思ったんですかね？」

我が船長の奇怪な行動に頭を捻り、考え込むがこれといった答えは出てこない。数分ほど黙り込んだ後、聡明な副船長ならあるいは、という別の妙案が思い浮かんだのだろつ。テーブルに着いていた全員から一斉に視線を浴びせられると、ベックマンは苦笑いをしながら応える。

「さあな、それを考えるのは俺の仕事じゃないんでね。これ以上の件について考えても、何にもならん」

大切な睡眠時間が減るだけだ、とこの話題を打ち切ると独り手酌で酒を楽しむ体勢に入る。

「副船長、ようやくお頭との付き合い方を習得してきたな」

「ああ、でも頼もしいんだか、そうじゃないんだか」

いつもストッパーとなるベックマンが傍観を決め込むとなると、どうやら役目は自分に回ってきそうだ。

遠くからは、シャンクスのご機嫌な笑い声が聞こえる。最後に頼れるのは自分だけだな。そう確信すると、明日は厄介ことが起こらないことを願い、グラスを掲げ一気に飲み干した。

島に眠るもの

「ザナンザ、あれがお前が言う宝島か！」

「その通りなんだが、やつぱり拍子抜けしたか？」

「いいや、そんなことないよ」

お宝のにおいがする。

そう呟いて目を輝かせるシャンクスの反応に、ザナンザは目を見開きその横顔を見つめていた。

「ん、何か俺の顔についてる？」

「いや、驚いた。前に手を組んだ奴らは場所を教えるとすぐ激怒したんだが」

あんたは違うんだな、と呟く男の肩をバシバシとシャンクスは叩く。

「まあ、そいつらの気持ちも解らなくないな」

隣にいる男と楽しく酒を飲み交わす内にすっかり夜が更け、月明かりと無数の星の瞬きの光が降り注ぐ中、2人は浜辺にきていた。さつきまで飲んでだ酒場のある港町から2・3キロ程離れた浜辺である。その浜辺から海を見渡した先、数キロ離れた所にその無人島があった。双眼鏡など使わなくても肉眼で確認することが出来る。目と鼻の先、とはまさにこのことだな、とシャンクスはぼんやり地平線を眺る。

「俺の話が本当だと、お前は信じてくれるんだな？」

「いや、俺はお前の話が本当かどうかなんてわからないよ」

「だったら何故、そんな楽しそうな顔をする？」

「お宝探しだぞ、楽しいに決まってるじゃないか！」

お前は楽しくないのか、と首を傾げるシャンクス。それに対して、難しい顔をしていた男はしばらく考え込んだ後、眉間に皺を寄せながら話し始める。

「この諸島はな、東にある大きな島を中心にほぼ全ての島に人が住

み着いて町を作り貿易で栄えている。にもかかわらず、一番西にあるあの島だけは無人島のままなんだ。何故だと思っ？」

「そうなのか、頑張れば泳いで渡れそうなのに。でも、無人島なんだから。……あの島だけ入っちゃいけないのか」

「ああ、感が鋭いな。その通りだよ、昔からこの辺に住む人間はあの島を聖域として崇めているんだ」

無断で立ち入ると神罰が下るといふ言伝えのせいで、わざわざタブーを破ってやろうなんてと考える悪い男を見つけるのに苦労した。そう言って肩を竦める隣の男の脇腹に、シャンクスはパンチを入れる。

「確かに、入るなって言われると、ますます入りたくなる」

「どうだ、それだけでも血が騒ぐだろ？」

「ああ、すっげえおもしろい！」

人が立ち入らない未開の島、近くにそんな島があるとは知らずに今まで酒三昧暮らしをしてたとは、勿体無いことをした。それに加え、立入れば神罰が下るといふ言伝えだ。皆が尻込みしそうな神罰も、シャンクスにとっては冒険をよりスリリングにし楽しむためのスパイスにすぎない。

物凄く楽しみだ。こうして男と話している今でさえ、宝島を目指し海に飛び込んでしまいたくて、頭天边から足の先までウズウズしてしょうがない。

「なあ、早く行こうぜ！　早くしねえと誰かにさき越されちまうよ！」

「まあ、待てよ。まだお宝の目星や取り分とかの話が終わっていない」

ザナンザがバッグからランプと紙束とペンを取り出すのを見ると、シャンクスの顔がさつと曇り、信じられないと騒ぎだす。

「おい、ここまで話をしといってお預けかよ！　冗談じゃないぜ、それもさつさと仕舞え」

焦らしプレイだなんて、男とやっても楽しくねえぞ、と喚くシャン

クスを無視して砂浜の上に歴史書と海図を広げる。準備ができると砂の上に腰を下ろし胡坐をかいて、まだ文句を言うシャンクスに、ここに座れと自分の向かい側をぱんぱんと叩く。

「くそう、生殺しだ。後で覚えてろよ！」

梃子でも動かない、と言わんばかりの男の態度に根負けして、どかっと砂を飛び散らせて座る。

「海賊さんと手を組むのは初めてだからな。話が違つと後で怒られないようにしてるだけだ」

シャンクスが飛び散らせた砂をパンパンと払いながら、ジロツと睨む視線をザナンザは受け流す。

「俺はそんなこと言わないぜ、それくらいもうわかつてるだろ？」

「一流のトレジャーハンターはな、手を組んだり、取引をする前にお互いの情報を共有するもんなんだよ」

「学がないからつて、デタラメ言うなよ。俺は騙されないからな」

「観念しろ、シャンクス。俺の話が本当か判らないなんて言われたからな。今からきつちり解らせてやる」

じつと自分を見つめるザナンザの目に、静かだが強く光るものを見つけたとうなだれた。どうやら知らない間に、己の発言が男のプライドを逆撫でしてしまったらしい。

この手の奴は、俺が納得するまで熱弁を止めないことを経験上知っている。

「わーったよ、話を聞くから、解りやすく手短に頼む……」

目の前で聞き分けの良くなったシャンクスに、今まで強張つた男の顔が緩み、ようやく口元に笑みが戻る。だが残念なのこにそれに気づいたのは、二人の頭上で柔らかい光を放つ月だけであつた。

翌朝、レッドフォー号の食堂には多くの船員が集まっていた。現在は早朝の仕事を終え、朝食が振舞われるまでの小休止時間である。厨房では、コックたちが手際よく作業をしており、パンの焼けるいい匂いが漂っていた。この狭い船内で一番広いのがこの食堂であるが、図体のかい男たちが一同に介すると歩くスペースもない程手狭となる。

そこには、昨夜のような楽しい雰囲気はなく、隣同士でひそひそと声で溢れていた。朝食が待ち遠しいのが理由ではない。皆、筋肉で覆われた丈夫な体を小さくし、狭いとも暑苦しいとも言わず、顔を付き合わせてこれから始まる冒険に浮き足立っていた。

「ヤソップ、遅れてすまない」

そんな中、資料と思しき分厚い本を小脇に抱えた男が食堂に入ってきた。寝癖1つなく綺麗に髪を束ね、昨夜の深酒を感じさせないしつかりとした足取りでベックマンは幹部の1人であるヤソップに近寄る。

「お、来たな、ベックマン。気にするな、俺の時計じゃ集合時間丁度だよ」

侘びを入れる男の肩をぽんぽんと叩き、フォローを入れるのは狙撃隊隊長のヤソップ。こちらはトレードマークのドレッドヘアに少し寝癖を残しつつも、その陽気さで場の雰囲気と和ませる。すぐさま準備に取り掛かるベックマンに、ヤソップはそつと近づいて耳打ちをする。

「一応聞くけどよ、お頭の姿が見えないが知ってるか？」

「雲隠したみたいだな、放っておいても朝食の時間に戻ってくるさ。あの人を作戦会議に参加させるのは骨が折れる」

赤髪海賊団では、毎回上陸前に事前調査で明らかになったお宝の情報やそれにまつわる話を伝達する集会が開かれる。遺跡や密林で遭難した等に、事前知識があれば己のみでも解決できる可能性が増すからだ。

そんな重要な集会ではあったが、船長のシャンクスは苦い顔をして

出席を断った。

「お宝探しはな、見つけるまであるかわからない、何があるかわからないから楽しいんだよ」

と、満面の笑みを浮かべて資料を片手に持つベックマンを煙に巻いてみせる。そう言われてしまえば、もう言い返すことはできなかった。

「一度だけな、無理やり聞かせたことがあったんだが…」

「へえ、お頭どうだった？」

「難しい話はわからん、と言って5分も聞かずに船を漕ぐ。偶に聞いても俺の話の腰を片っ端から折る、散々だった」

「あはは、だろうな！」

お頭の意見も一理ある、とも思うのでこの集会は希望者のみの任意参加という所で落ち着いた。それでも、こうしてベックマンの話を聞きに来るものは大勢いる。難しい言葉を使わず解りやすく丁寧な話は、皆に人気で出席者が後を絶たないのだ。

「ほんじゃ、主役も登場したしよ、さっさと集会を始めるか」

「ああ、任せてくれ」

片手を挙げて、皆が見える場所へと移動していくベックマンの後ろ姿を見送る。あの男の仕事は、目的を確実に遂行し、且つ皆が無事に戻る策を考えることだ。その辺に関して、お頭は勿論皆からの信頼を勝ち得ている。

そして、自分の仕事も果たすため椅子の上に乗ると大声で群衆に向かい語りかける。

「おい、野郎ども！ そろそろ噂話じゃ物足りなくなってきただろ？ まだ見ぬ島に眠るお宝の正体が、今まさに副船長のありがたいお話でベールを脱ぐ。耳の穴をかつぽじってよく聞けよ！」

今まで借りてきた猫のように大人しかった男たちから、どわっと歓声が上がる。その歓喜の声をベックマンは両腕を広げながら一身に受けると、ヤソップに目配せで礼を伝えたと話を始めるのだった。

昔々、この世には闇の王と呼ばれる者がいた。この闇の王は、地下世界に棲み地上の人間を支配していたのだった。ある日、1人の男が闇の王によって地下世界に召され、殺された。そして、その体は地下へと埋められていったのだった。

またしばらくして、2人の男が闇の王に召された。しかし、この2人の男には不思議な力があつた。

彼らには、永遠の命があつたのだ。

闇の王の御前で、互いに剣を持ち殺し合いをするが、敗れて地に倒れた男に向かって、立て、と呼びかけるとたちまち蘇り再び剣を持つて立ち上がるのだった。

その様を目の当たりにした闇の王は、ひどく興奮し、2人にこう懇願したのだ。

『なんて素晴らしい力だ、私にも同じことをしてほしい』

闇の王の望むまま、2人は剣で王の体を突き刺す。

しかし、闇の王が蘇ることはなかった。

こうして、闇の王を倒した2人の男の体は天空へと舞い上がり、太陽と月となった。

最初に殺された男は、穀物へと生まれ変わった。

「これが、この海域の島々の文明に伝わる神話だ。後に、この2人の男の末裔とされる一族が王族となり支配した。東にある島には、その遺跡が多く発見されているそうだ。だが、俺達が向かう島はその王の遺体が葬られている墓がある」

権力者の墓穴には、その権威を示すように多くの金品が埋められるからな、とベックマンの言葉に、おおと感嘆の溜息が漏れる。皆、金色に輝く杯や装飾品を思い浮かべてしばらくうつとりだ。

「今回の山は、盗掘か！ なかなか面白そうだな」

「でもよ、そんな暴いて大丈夫か？ 入るだけでも神罰が下るんだろ？」

「やれるもんなら、やってみろってんだ。神罰なんて返り討ちにし

てやるよ」

船員の反応は、三者三様、バラバラであつたが、皆神の怒りを恐れて上陸を尻込みする者はいない。

次第に話題は神罰の内容から、一番怖いものへとシフトした所で、ベックマンは解散を呼びかける。

その声を合図に男たちは一斉に立ち上がる。食堂を後にするものいれば、そのまま残るものもいる。朝食までは、各自自由時間だ。

「副長は、どんな神罰が下ると思いますか？」

興奮冷め切らずといった感じの船員が、ベックマンに質問をすると苦笑いをしながら答える。

「さあな、言い付けを破つて島に上陸した者の記録は見つからなかったからな。でも、そうだな。もしその神の罰とやらが俺に降りかかったら世紀の大発見だ」

その際は、内容からその症状に至るまで刻銘に記録するつもりだ。

副船長の探究心に火がついたのか、楽しそうに微笑みながら食堂を後にする。心なしかその足取りも軽やかだ。

「副長、思ったより楽しそうですね、ヤソップさん」

「副長はな、似てないようでああいう所はお頭にそっくりなんだよ」
ベックマンが聞いたら顔をしかめそうな発言に、その場の一同が声を立てて笑うと、準備が整ったのかコックたちが配膳を始める。若い衆もコックを手伝い皿やナイフとフォークを並べていく。

すると、まるで見ていたかのようなタイミングでシャंकクスが現れるのを見て、一同は思い出し笑いを浮かべたのだった。

いざ、王の島へ（前書き）

ようやくかつこいいお頭を書けました。自分ではかつこいいと思つてますが、それが伝わるかビクビクです。

戦闘シーンと海を渡るシーンは、とても楽しんで書けました。満足です。

例に漏れず、苦手だな、と感じた方は戻るボタンを連打して、見なかつたことにして下さい。

いざ、王の島へ

「信じらんねえ！ 普通こんなになるまで話し続けるかよ！」

お天道様もすっかり上りきつちまったじゃねえか、と喚くシャンクスの前をザナンザは目を擦りながら歩く。2人は浜辺から、船のあ
る港へと肩を並べて向かっていた。

今日は港町で市が立つ日なのだろう、掛け声を上げて客を呼び込む
商売。新鮮な食材を買い求め値段交渉をする町人。大勢の人間で賑
わうその繁盛振りのせいで、前へ進むのはおるか会話すら大声を上
げないと成立しない。

「信じられないのは俺の方だ。全く、俺の話を半分も聞かずにぐー
すか寝やがって！」

「ああ、何だつて！ 何か言ったか？」

この海域の歴史や文明について講義をするも、ちよつと目を離れた
隙に寝てしまう男を叩き起こしながら、ようやく話し終える頃には
朝日が出ていた。お陰で徹夜する羽目になってしまった。深酒した
体に寝不足がとどめをかけたのだろう、ザナンザの頭にシャンクス
の大声がギンギン突き刺さる。

「だいたい、なんでお前はそんなに元気なんだ」

「ようやくお宝探しに行けるんだぜ、これから気合入れないとな！」
まずは腹ごしらえだな、うんうんと1人納得すると屋台へと飛びつ
き、気が付けば既に口一杯に食べ物を詰めていた。本当にタフな男
だな、と呆れを通り越してその体力に感心しながらシャンクスを眺
めていると、両手に食べ物を抱えて戻ってくる。

「おい、ザナンザ。お前も食うだろ！」

「あ、ああ。ありがとう、だが結構だ。それよりあつちに船を泊め
てる、そこへ急ごう」

「何だ、お前食べないのか。どこか腹でも痛いのか？」

「俺の腹の心配はいいから、これから渡らなくちゃいけない海を心

配してくれ」

「ああ、勿論！ 俺に任せておけよ。それにお前、そんなに神経質だとこれからが大変だぜ」

男の気持ちを知ってか、シャンクスは隣で難しい顔しているザンザを宥めるように背中を叩いた。その手のひらは硬く、過酷な船旅で出来たのか肉刺^{まめ}があちこちにある。武骨な手であるはずなのに、暖かく、緊張で固まっていた体が楽になっていくような感覚に捕らわれる。

「俺の目に狂いはなかったみたいだな」

「おい、早く行くんだろ」

おいてくぞと、目の前で楽しそうにはねる真つ赤な髪と麦藁帽子が1人先へ進んでいくのを追いかけるため、男は小走りで駆け寄った。

港に着くと、そこには数多くの船が泊まっていた。船と呼ぶにはどうかと思うような2人乗りのボートも、100名以上が乗船できるようなガレオン船も、シャンクスにとっては皆等しく船である。

「ようやく海に出れるな」

ゴムひもで首に掛けていた麦わら帽子を頭にかぶり直し、目の前に広がる海原を目を細めながら見渡す。白い雲はゆつくりと潮風にあおられ、まっすぐに流れていく。強すぎず、弱すぎもしない風は島の中心から海へと吹き、この風が追風となっていていつもより速く船は進むだろう。今日はまさに航海日和だ。

「やっぱり性^{さが}なんだな、シャンクス」

「何が？」

「目が生き生きしてる。今までのお前は海に飢えてた魚だったようだな」

「やっぱりわかるか？ 俺はエラ呼吸なんだよ、長く陸にいと干上がったちまうんだ」

両手を耳の横でバタバタと動かし、魚の真似をするシャンクス。器用に唇を突き出してパクパクと動かす姿がさつき見た魚屋で売られ

ていたマンボウそっくりで、ひとしきり笑わせてもらった後、俺の船へと案内しようとした時だった。

前後左右から人影が飛び出してくる。どうやら知らないうちに、後を付けられていたらしい。あつという間に大勢の男に囲まれた2人の男は、サーベルの柄に手をかけ互いの背中を隠し合うようにポジションを取る。

「おい、ザナンザ。あいつらお前の知り合いか？」

「いや、俺の知り合いにこんな人相の悪い奴らはいない」

「本当かよ、嘘くせえな」

囲い込みに成功し優位な体勢をとった男たちは、その余裕からか薄ら笑いを浮かべている。その男たちのリーダーなのだろう、一番図体がデカく凶悪そうな男がシャンクスとザナンザの前に出た。

「兄ちゃんたちだな、あの王が眠る島へ入ろうとしてる命知らずな男は」

大きな半月刀を片手でギラつかせ、2メートル以上はある巨体を揺らしながら大男はザナンザに迫る。シャンクスはすぐ攻撃できる態勢をとったまま静かに事のなりゆきを見守った。

「そうだとしたら、どうするつもりだ？」

「いや、どうもしないさ。俺たちもあの島にあるお宝を狙ってるんだよ。ただな、あの島を囲む大渦が越えられなくて困ってたんだ」大男は芝居かった仕草でやれやれと肩を竦める。

「それは、ご愁傷様だな。先を急いでいる、道をあけてくれないか？」

「待てよ、取引だ。お前たちの命と引き換えに、俺たちをあの島へと連れて行くんだ。お前が持つ島の地図も渡してもらおう」

いい取引だろう、と笑い声を上げる男たちを余所にザナンザは背中合わせのシャンクスに耳打ちをする。

「どうする、見た所律儀に約束を守るとは思えないんだが……」

「そつなんだよな。さて、困ったな」

「嘘をつくな、困った奴がそんな嬉しそうな顔をするわけないだろ

う」

「あ、ばれたか？」

くつくつくと笑う声が、背中越しに伝わってくる。さすが海賊だな、場慣れしている、と思いながら自分たちを取り囲む男たちの人数を数える。

「やめな、あんちゃんたち、こっちは30人もいる。大人しく言うことを聞いといた方がいいぞ？」

「30人だそうだ、シャンクス。1人頭15人だ」

「俺が全員片を付けてもいいいんだぜ」

そう挑発的な笑みを浮かべ啖呵を切ると、シャンクスがシュツと風を切る音を立てて飛び上がる。一瞬で2メートル近くまで体が舞い上がり、膝蹴りが大男の下顎に打撃を与えるの見届けた後、ザナザも目の前の男たちに飛び掛った。心臓付近、あばら骨の間の急所を目掛けて肘鉄を食らわす。すると呻き声を上げ、足元に男はうずくまった。

不意を衝かれ一瞬怯んだ男たちも、すぐに目の色を変えて2人に向かつて一斉にサーベルを振り下ろしてきた。その内の1人の腕を掴み、ザナザは相手の力を利用して投げ飛ばす。

「ザナザ、お前思ったより強いな！」

「シャンクス、残りは任せたぞ」

ああ、とシャンクスの威勢のいい返事と男たちの怒声や悲鳴を背中で受け止め、男たちの囲いを抜けると男は港に泊めてある1艘の船へと向かう。走り去った男を追いかけようと走る奴らの後頭部に、シャンクスはすぐさま蹴りをいれて次々と地面に叩きつけていった。

「赤髪のお前、海賊だな？ 海賊が何故あの陸の男に手を貸す？」

「あいつにナンパされたんだよ。本当に、モテる男は辛いな」

「こんな所で騒ぎを起こせば、すぐに海軍の奴らが来るぞ！」

ピンチだな、と脅す男の言葉を気にすることなく、襲い掛かってくる男の脇腹に回し蹴りを入れる。

「それもそうだな、熱が冷めるまであの島でお宝探しして待つとす

るか」

「行かせるかよ！」

さすがにこの人数を手加減しながら相手をする時間がかかる。まだ攻撃をしようとする男たちを迎え撃つため、構えの体勢をとった所でザナンザの声が聞こえた。

「シャンクス！ こつちだ！」

既に帆を張り、風を捕まえて進み出した船にあの男は乗っている。

「おい待て、赤髪！」

シャンクスは棧橋を勢いよく走りぬけ、橋が途切れた所でジャンプし、近くまで来ていた船に飛び乗る。陸では2人の攻撃を受けなかった男たちが、ギャアギャアと吠えていた。

「ナイスタイミングだな」

「宝島までは、俺が舵を取る。その後は頼んだぞ」

「わかつてる」

風を掴んだ船はみるみる内に外海へと進み、港にいた人間も米粒の大きさになっていた。

シャンクスは数日振りに波で揺れる船底と前髪を撫でる潮風の感触を楽しみながら、これから始まる冒険に胸を膨らませるのだった。

「その腰のサーベルは使わなかったんだな」

シャンクスが船首の方で胡坐をかき、久々の海を楽しんでいると後ろにいる男に話しかけられた。2人の乗る船はボートに毛が生えた程度の物であったが、乗り手の思うまま海面をすべるように進む。男の質問にシャンクスは、ああ、と応じると先の乱闘で1度も抜かれることがなかったサーベルの鞘を触りながら答える。

「あいつらはゴロツキだけどよ、一応陸の奴らだからさ。それに、殺したりなんかして海軍を呼ばれても面倒だろ？」

「さすがのお前でも海軍は怖いかな」

「そう笑うなよ、違うって。俺は海軍に来られても困らないけどよ、

仲間が煩いから」

「は、仲間？」

意味が分からず、目をパチパチさせている男を無視してシャンクスは話を続ける。

「あいつら酷いんだよ。俺を連れて行くと問題が起きるって言ってるの港に置いていったんだ」

口ではそう言うものの、シャンクスは仲間の顔を思い出しているのかくすぐったそうに笑う。

「い、いいのか？ 黙ってここには来てるんだろう？」

「大丈夫だ、しばらく帰ってこないって言ってたし。それに、さすがに船長を置いていくことはないだろ！」

流石のザナンザも、今の問題発言を聞き流すことが出来なかったのだろう。あまりのショックに、手にしてた舵がすべり、がたんと船体が大きく揺れる。

「うお、気をつけるよ。落ちるところだったじゃないか！」

「お前、船長なのか？」

「俺の話聞けよ、そろそろ宝島に近いし舵変われ！」

ぽかんとした隙にシャンクスに舵を盗られたので、男はしぶしぶ船首の方へ座った。腕を組み、先程の会話を思い出し考え込む。

「……不味いな。よく考えてみると、俺は海賊船の船長を誘拐した男になるじゃないか」

全て物事が上手く進んだとしても、あの島に帰って行ったら最後。シャンクスの腕自慢の部下に、殴り殺される。己の身に起きるだろう惨劇を想像するだけでも、全身の身の毛がよだつ。

「何考え込んでいるんだよ、もうすぐ大渦だぜ」

顔を上げれば、あと数メートル先に轟々と唸る渦の大群が見えてきた。帰った後の心配はここを抜けてからにしよう。

そうだ、この難所をクリアするため、男は腕のいい船乗りを探していたのだ。

「頼んだぞ！」

「おうし、しっかり捕まってるよ！」

どん、と船縁に大きな衝撃を受けるが、転覆することなく渦の軌道に乗る。船体は激しく左右に揺さぶられ、水しぶきで服が濡れるが、気にする余裕は微塵もなかった。

シャンクスは四方の海流を読むため眼球を忙しなく動かし、手元の舵とヤードを慣れた様子で素早く裁いて、飲み込まれる前に渦から渦へと次々に移動していく。

「……凄い」

まるで最初から進むべき道が分かっていたかのように、2人の乗る船は渦の大群を難なく進んでいく。気が付けば攻略不可能と半ば諦めかけた海域を既に半分通過していた。

「シャンクス、海流の計算は得意なんだな」

「そんなもんねえよ」

波の音が大きく、シャンクスの声は男に届かなかったようだ。

「何だって！」

「計算なんて、しないよ。感、全て俺の感だ」

嘘だろ、聞かなければよかった。

「偉大なる航路を航海したって言うのは大ホラだったのか！」

宝島までは、まだまだ十分距離がある。大渦の群れを越えた先は、巨大な海流だ。あれをシャンクスの感のみで渡り切らなければならぬのかと思うと、全身から血の気が引く。

「嘘じゃないよ。俺は嘘苦手だからよ、すぐばれるんだ」

ごご、と周りで唸る水の音は凄まじかったが、その騒音の中でも男の陽気な声はよく響いた。

「そういう問題じゃないだろ」

「いいから、黙って任せておけよ。あんまり喋ると舌噛むぞ」

水が唸る音が次第に大きくなる。無駄話をしてる間に大渦を抜ける所まで来ていた。船体の揺れが激しくなる。どうやらここで、覚悟を決めなければならぬようだ。巨大海流は、今まで渡ってきた大渦の流れをも取り込み、滝の様な勢いで目の前を横切っていた。

「無事島に着いたら覚えてろよ！ 顔面に1発入れてやる！」

「ははは！ 俺の感を馬鹿にしてるようじゃ、お前のパンチは当たらないぜ」

シャンクスの高笑いを聞きながら、男は落ちたりしないよう船体にしっかり掴まる。あとは、後ろにいる男が上手く操舵することを神に祈り、目を閉じたのだった。

上陸開始！！

じやりじやりとした感触が頬にあたる。これは、砂だな。波の音が近くであるから、海の近くだというのはわかる。どうやらここはどこかの浜辺らしき所で、俺はうつ伏せで倒れ込んでいるらしい。

「…ここはどこだ？」

ひしひしと痛む頭でここに至るまでの過程をぐるぐると思い出す。シャンクスの操舵で大渦と海流を渡って、その後。最後の方で頭を強く打ったような気がした、のは覚えているんだが結局どうなったのやら。

顔面についた砂を手のひらで払いながら寝返りをうち、大の字になって浜辺に寝転がる。

「生きてるなんて、嘘みたいだ…」

天空ではさんと輝く太陽の光が眩しくて、手のひらを日よけにしながらぼんやり眺めていると、茂みがガサガサと音を立てる。人の気配に慌てて起き上がり、条件反射で腰に挿したサーベルの柄に手をかけ様子を伺う。

「ようやく起きたか？」

茂みから出てきたのは、赤髪を揺らし左目に3本の傷跡がある男だった。につこりと微笑みながら、軽い足取りで俺に近づいてくる。

「なんだ、シャンクスか。驚かすなよ…」

「おれよりもお前、いつまで寝てるんだ。早く冒険行こうぜ！」

何が、早く行こうだ。待ちきれなくて島の様子を先に1人で見に行っていたくせに。泥で汚れたシャンクスの足元を見ながら、全身の砂をのそのそとした動作で払っていると、赤髪の男は顔を覗き込んでくる。

「おい、まだ頭痛むのか？ やっぱり最後のあれがいけなかったみたいだな」

「最後のあれ？」

「わざとじゃなかったんだよ、ただちーとばかり手が滑っただけでさ！ お前もそう思うだろ？」

痛む頭を捻り考え込む隣でシャンクスがぺらぺらと話し出す。

「しっかし、凄かったなああの海流。渦も凄かったけど、あの流れの速さには流石の俺もビックリだな。お陰で島に辿り着くまでに1回転しちゃったよ」

ああ、思い出してきた。あの後、俺たちが乗った船は島の沖で流れる海流の勢いに弾かれ、宙を華麗に舞い、海へと叩きつけられたのだった。あの時悲鳴を上げなかった自分を褒めてやりたい。

「その後、無事島についたシャンクスが浜辺に上陸するために取り出したオールが俺の後頭部を強打した」

「ああ、おかげでお前を船から下ろすの大変だったよ」

「誰のせいだ」

さつき謝っただろう、と威張る男を無視して目の前にそびえ立つ密林を睨みつけた。

海を渡るだけでも1回死にかけたし、オールで頭を殴られもしたが、これからはもつと危ない橋を渡ることになるだろう。

「お宝まで、あともう少しだな」

「ああ、ここは当りだよ。お宝のにおいがぶんぶんする」

「事前調査もばっちりだからな」

俺たちは互いに肩を叩きあいながら、声を立てずに笑いあうと、お宝が眠る密林へと一步を踏み出した。

* * *

赤髪海賊団は予定通り、朝食後に宝島へと上陸するため大渦と巨大海流の海域を渡った。優秀な航海士チームと副船長による緻密な事

前計算と的確な指示により、レッドフォース号は大波にあおられ揺れることもなく、その様子はまさに堂々たるものであった。

碇を下ろし船体が流されないよう固定すると、たちまち甲板は下船をする水夫と船員で溢れ返った。久々の陸地、しかも宝島というので皆どこか浮き足立ちながら作業に専念している。

上陸組は全員で30名、希望者が続出したため厳選たるくじ引きでメンバーが決定された。幸運にもくじに当たった者は両手の拳を握り締め、鼻息荒く足早に自室へ戻り荷造りに勤しんでいる。不運にもくじ引きに外れた船員は甲板で未練がましく島を眺めて下船準備をしている船員を茶化して憂さをはらしていた。

そして、ここにもくじ運の女神に見放された船員が1人。棒切れの先に塗られた赤い印を、眉間に皺を寄せて睨みつけている幹部がいた。

「決まりだな、ヤソップ」

「そんなに見つめても、色は変わりませんよ？」

「よかったじゃないか、久々の陸だぞ！　しかも宝島、楽しみじゃないか！」

ガツクリと肩を落しうな垂れる同僚の肩をぽんぽんと叩き、無責任なことを言いながら幹部一同はすがすがしい顔で笑っていた。

「上陸はお頭と俺とヤソップだ、残りは船番を頼む」

ベックマンは議事録にペンを走らせると、パターンと議事録を閉じる音が部屋に響く。これにて幹部の作戦会議は終了だ。他の幹部と副船長も足早に部屋へと戻っていくので、ヤソップも仕方なしに自室へと戻ることにする。先ほどの会議で船員30人を引率する幹部を選任するくじが行われた。幹部枠は3人、お頭は当然として次に副船長が拳手をし、残り1名を選ぶくじである。いつもは皆その”当り”を巡って白熱したバトルが行われるのだが、いかせん今日は勝手が違っていた。

部屋で一通りサバイバル用具と愛用の銃器、そして銃弾をベルトの

ホルダーに装備して甲板へと向かう。

（ああ、なんでこんな面倒なことになっちまったんだろうな……）
梯子を上り甲板へと顔を出すと、顔を出した幹部を見つけ水夫たちが声をかけにやってくる。

「すみません、ヤソップさん。まだ上陸準備が整ってなくて」

「今日は俺上陸することになりました。よろしくお願いします！」

「俺あつちで待ってるからよ、準備出来たら呼んでくれ。それと、サポート期待してるからな」

頼んだぞ、と肩を叩くと船員は頬を染めて深々と頭を下げて走り去っていった。

俺はレッドフォース号の甲板にあるパラソルの下へと向かう。ガオレン船には珍しい、植物が生えたそこは一種のオアシスで船員たちの憩いの場となっている。

そこには既に先客がいるようだ、聞きなれた同僚の声が聞こえてくる。

「おおヤソップ、お頭とクルーたちを頼んだぜ。俺たちは、大人しく船番してるからよ」

皆、楽しそうに酒の入った杯を片手に、カードゲームに興じたり、無駄話をして楽しんでいる。

「おれも、冒険しに行きたかったな。でも仕方ないな、くじ引きだもんよ」

「そうそう、こればかりは仕方ない。さあ上陸はきれいさっぱり諦めて、酒でも飲んで待つとしようか」

「そう言えばよ、珍しい酒が手に入ったんだ。何でもトウモロコシウィスキーで出来た蒸留酒らしいぜ？」

「バーボンっていうらしいですよ。これちょっと匂いがきつくて癖があるけど、病み付きになりますね？」

此れ見よがしに、自分のくじ運の良さを自慢する皆の隣にオレはドカツと腰を下ろすとギロリと睨みつけてやる。

「嘘付け、お前ら！ 嬉しそうなのがバレバレだぜ、メンバーから外れて安心してるんだろ！」

ドスの利いた声でそう言つてやるが、歴戦の古豪となりつつある彼らには何の効果はなかった。悔しかったので酒の入ったグラス隣から奪い、珍酒の味を堪能してやった。確かに、少し癖が強い酒だ。ロックで楽しむには少し強い。

「だってよ、お頭は何時になく張り切ってるし、副長はお頭のお目付け役を放棄するし？」

バンドナを巻いた同僚の指の先に皆が一斉に顔を向けると、そこには今回の騒動の原因の1人である副船長の姿があった。

ベックマンは、リュックにナイフやロープ、水や銃弾といったサバイバル用品を一通り詰めた後、残りのスペースに沢山のノートにペンとインクをいそいそと詰めている。皆の視線に気づいたベックマンは、瞬きをしたがすぐ楽しそうな笑顔をして答える。

「途中で記入する紙がなくなるといけないからな、備えあれば憂いなしだ」

ご機嫌に鼻歌を歌っている少々頭のネジが緩んだ副船長に、お頭の暴走を未然防止する役目は期待でそうにないのは明らかだ。

「お宝探しも捨てがたいけどよ、厄介ごとは避けて通るに限るな」これまでの経験から、一同しみじみとその言葉を胸に染み付かせている。しばらくして、甲板で作業をしていた船員の責任者から準備完了の報告を受けると、俺は腹を決めて立ち上がった。

「仕方ねえ。こうなりゃ、存分にお宝探しを楽しんでやる」

愛用の銃を方に掛け、後ろやる気のないエールを送る同僚に手を振りながら、下船をするためボートへと乗り込んだのだった。

昔話を道連れに

母船から数隻の偵察用ボートを下ろし、宝島の南に位置する入り江から赤髪海賊団探検隊30名と幹部3名は上陸した。ボートを波に流されないようしつかり固定し、浜辺から内部へと侵入していく。探検隊に選出された船員たちは未開のジャングルを慣れた様子で隊列を組み、先頭を歩く幹部の後を歩いていた。

「これで俺はタブーを破っちまった訳だな」

船員の1人が荷物を肩にのせて、しみじみと呟く。探検隊の中でも一番若く、経験の浅い新人のばやきに、先輩たちは顔を見合わせて悪い笑みを浮かべる。

「神罰かあ、それは勿論痛いに決まってるよな？」

「痛いのも嫌だけだよ、俺は酒が飲めなくなるやつは嫌だな」

「馬鹿やろー、神罰って言ったら死ぬまで終わらない苦痛が降りかかるってというのが常套だろ」

どんどん顔色が青ざめていく新人の反応に面白がって笑いながら、それでも揶揄したアフターフォローも欠かさないアットホームな団風が売りの赤髪海賊団。

先輩の冗談を真に受けしょんぼりと肩を落として最後尾を歩く新人の背中を、心優しい先輩の1人がぼんと叩いて励ます。

「心配すんなよ新人。俺たちが一緒にいるだろ？」

「…先輩！」

「死ぬときは、俺たちも幹部も一緒だからよ！」

「いえ、全然フォローになってないっす！俺の感動を返してくださいよ」

「わかってねーな、生きるも死ぬも一緒。これが俺たちの人生だろ？」

訳がわからない、と首を傾げるが、先輩はそれ以上言わずに笑いながら先に進んでいく。

生きるも死ぬも一緒か…、先輩の言葉をもう一度胸の中で呟く。まだ乗船して間もないがこの海賊団での自分の生活を思い出してみる。大嵐にあった時は何度も死ぬ思いをしながらお互いを叱咤し、荒れ狂う海を乗り越えることが出来た。初めての戦闘では怪我もしたけれど、勝利の宴ではこれでもかと酒を飲み、皆で歓声を上げ肩を組み甲板の上を笑い転がった。

神罰はまだ怖いけど、どんなに痛い思いをしても自分の周りには気のおけない船員がきつと一緒にのだらう。そんな姿を想像して、まあ悪くないと思っている自分に苦笑いをする。

「俺も海賊になってきたってことかな」

「おーい、何してんだ。さっさと来い！」

気がつけば集団と10メートルも離れてしまっていた。ずり落ちてくる荷物をもう一度しっかり肩に乗せ直し、前方を歩いている逞しい背中を目指して、慌ててその後を追いかけた。

「お頭ー！ こっちは準備完了しました」

「どこから調査しますか？」

場所は変わって、ここは宝島の中心部。島の半径がそう距離がないのだらうか、1時間ぐらい島を歩いた赤髪海賊団一行の前には、広い草原が姿を現したのだった。

「この島での滞在期間は最長で3日だ。そう広い島ではないし、ここに野営基地を設置しよう」

副船長ベン・ベックマンの進言に、いいよ、という軽いのでしゃんクスがOKを出したので、一同は中心に位置するこの草原でキャンプの用意をすることとなった。

人数分のテントを張り、荷物の紐を解いてキャンプの準備を終えるのと、いよいよ念願のお宝探し開始である。

「よし！ まずは、あの山登ろう。きつと眺めがいいぜ、それからどこ行か決めよう！」

腰に手を当てて、遠くに見える火山をぴつと指差しながらそう言い

出す船長。いまにもあの山目指して駆け出しそうな勢いである。い
つもなら、暴走するお頭に待ったをかけるのは副船長の役割である
が、生憎と彼がやってくる気配がしない。

（さっそく、俺の出番って訳ね…）

もはや船員一同では止めきれなくなってきたお頭に、ひとまずよお、
と咳払いをしながらヤソップは話しかける。

「隊を食料調達と先遣隊にわけねーか？ 帰ってきてから飯に困る
のは、よくねーと思うだろ」

「ふむ、確かに…。じゃあ、半分に分かれてくれ。あの山に行く
奴は、俺とヤソップに着いていく。残りはベックマンと一緒に留守
番だな」

これでいいだろう、と満足げに頷くお頭を他所に船員たちはほつと
胸を撫で下ろす。満場一致でその案に決まり、素早く隊は半分に分
かれシャンクスたちは山へと向かう手筈を整えたのだった。

留守番組に大きく手を振りながら、一同は山を目指してジャングル
の中を進んでいく。先頭を歩くのは決まって、赤髪のお頭である。

もう1人の幹部であるヤソップは殿しんがりを勤めているので先頭集団か
らは様子は伺えない。

「お頭、とても楽しそうですね？」

ぱきぱきと地面の小枝を踏みつけながら陽気に進む船長に声をかけ
る。その後ろを歩く先遣隊のメンバーは各々サーベルを構えたり、
肩に担いだ長身の銃器のスコープを除きながら、周りに気を配りつ
つ進んでいた。ギアアギアと島に生息する鳥の鳴き声、太陽の光
が差し込まない密林。湿度も気温も高く皆薄ら汗をかきながら、道
なき道を足の踏み場を確認しながら慎重に前進していく。

「おつ、わかるか。あの山にずっと行きたかったんだよ、高い所は
きつと気持ちいいぞ」

辺りの不気味な雰囲気にもかかわらず、シャンクスの声は明るくて
力強い。後ろを振り向くことなく船員にそう答えると、目の前に横

たわった流木の幹を軽々飛び越える。まるで羽が生えてるようなその動きに感心しつつ、自分も幹を片手で押さえて飛び越えると話を続ける。

「お頭は一度この島に来たことがあると聞きました」

「ああ、うんと昔にだけだよ。でも宝は見つけられなかった」

船長と男の会話を聞きつけた船員が、興味深々といった体で会話に加わってくる。

「だから、宝探しをやり直しに来たんですか？」

「なんで宝を見つけられなかったんですか？」

「あの山も行ったことあるんですか？」

「おいおい、さすがの俺でも一度に言われても答えられないぜ」

そう言うのと、からからと笑いながら話は打ち切りだと言わんばかりに先に進む。それでも、諦めきれずにシャンクスの背中を、期待の眼差しで見つめ続ける。視線で背中に穴が空くんじゃないか、と思うくらい固唾を呑みながら黒いマントに覆われた背中を見つめっていると、耐え切れなくなって先に折れたのはシャンクスの方だった。両手を挙げて降参のポーズをとりながら振り返ると、船員たちから歓声が上がる。

「話、聞きたいか？」

目を輝かせて、大きく頷く一同に気をよくしたシャンクスは笑いながら前へと進む。

「俺はあの山に行きたかったんだけどよ、その時一緒に行った男がベックマン顔負けの堅物でさ…」

目的地を目指し歩く先遣隊一同は、シャンクスの昔話を行進曲代りに、海賊にしては統率の執れた動きで不気味なジャングルの中を行進していったのだった。

* * *

獣道すらない無人島を2人の男は歩いていった。前に行く1人はトレ

ジャーハンターを名乗る青年ザナンザと、もう1人は赤い髪に麦藁帽子を乗つけてたシャンクスだ。島の中心部を通り過ぎ、2人は無言で歩いていた時だった。

「俺さ、思っただけど……」

軽快だった足取りをぴたり、と止めて話だしたシャンクスをザナンザは振り向いて首を傾げる。そこでシャンクスは両腕を組み、ぶつぶつと呟き俯いてうんうんと唸る。何か問題でもあるというのだろうか？

「シャンクス、どうした？」

今までお宝探しにノリノリだった男が急に歩みを止めた理由がわからない。男が話したすまで、考え込んで俯く真っ赤な頭をつむじを見つめているとシャンクスの頭の中で結論が出たようだ。

「やっぱり北に行くべきだと思っただよね」

「はあ？」

「あの北の山。すげー高いじゃん、どこに何があるか一発でわかるぜ！」

名案だと、ひとり満足げに納得しているシャンクスは放っておくとして、男も北にある山を見上げる。

火山なのだろう、山には森林はなく岩肌が遠く離れたここからも見える。シャンクスの言う通り、高さもあり眺望は抜群なのは間違いないだろう。だが、駄目だ。

「何言ってるだ、却下だそんなの。俺たちはまっすぐ東へ行くんだ」

「いいじゃないか、ちよつとくらい付き合ってくれよ」

「悪いが、道草している時間はない。日が傾くまでには到着しなければならんだ」

「なんだよ、お前が言う東にはいったい何があるっていうんだ？」
じろり、とシャンクスに睨まれるがここで折れる訳にはいかない。
こほんと咳払いをしながら懷に手をいれる。そしてゆっくりと1枚の地図を取り出して男に見えるようにしてやれば、赤髪の男は目を

ばちばちとさせた後、すぐ首を伸ばして覗き込んできた。さっきまで眉間に皺を寄せていたというのに、今ではすっかり怒りを引っ込め目の前の古地図に夢中である。

「なんだよこれ、凄い古いな。お、もしかしてこれが港であの連中が狙ってた地図ってやつ？」

「そうだ。おそらく、上陸が禁じられている島を過去秘密裏に調査した時書き残したのだろ」

手に入れるのに苦労した、と苦笑いする男を他所にシャンクスは地図を隅から隅までじっくりと眺めていく。

そこにはほぼ丸の形に近いこの島の輪郭が描かれていた。北には大きな山の絵、南には砂浜、西には岩山の絵、そして東には建物らしき絵。微妙なズレはあるものの、ほぼ東西南北に絵柄が書き込まれている。

「なんだよ、こんなもん持つてるなら最初にだせよ」

「俺は昨日の夜お前に見せたぞ。それをお前は寝てばかりでちつとも見なかったじゃないか」

港町の外れにある砂浜での深夜講義を思い出し、思い当たる節があったのだらう。シャンクスは責めるような男の視線にははたと笑って返し誤魔化する。

「……あれ、この地図の端にあるマーク？ よくわからないけど、これは何？」

「ああ、これか。おそらくこの島に残る遺跡、その遺跡を作りあげた古代王朝のマークだらう」

「で、話を元に戻すが……この地図をよく見ろ、今俺たちはここにいる」

ザナンザは指でほとんど古地図を叩き、熱心に解説を始める。

「そして東、地図でいうと右だな。ここには遺跡がある。遺跡といえはお宝がある確率が高い。だから、こっちだ」

「わかったよ。でもさ、やっぱり俺はあの山だと思うんだよね」

「……根拠はあるのか？」

同じお宝探しもとい盗掘を生業とする海賊でも、我々とは違う方法で目的を遂行するのだろうか。それとも、なにか策があるのだろうか。ここは、ゆっくりと、その真意を聞くべきだろうか。

「え、根拠ってあれだろ？ 確か、理由を言えってことだ」

「まあ、…だいたいそんな感じだな」

「そうか、なら簡単だよ。俺があそこに行きたいからさ！」

これでいいだろう、と満足げに頷きくりと方向転換をするシャンクス腕を掴む。

期待した自分が馬鹿だった。

「東に行くぞ。遺跡でお宝探した、文句ないだろ」

「なんだよ、理由行つたじゃないか！ 北だ、北に行くぞ」

「観光に来たんじゃないんだ、そんな理由で時間を無駄にできない」
ずるずると抵抗する男を引きずって、東へと足を向ける。だが、引きずられている男も中々しぶとく異を唱える。

「だからさ、初っ端からメイスイベントに向かう必要ないだろ。もう少し見て回ろうぜ」

「お前、絶対山に行つた後も東に行く気ないだろう！ その手には乗らないからな！」

「という訳だ。別に面白くもない話だけどな」

船長の昔話を聞きながら歩くこと20分、めつたに聞けないお頭の昔話に皆苦笑いした。今でこそ船長の威厳があるが、若い頃は今よりももっとやんちゃな性格だったようだ。

「で、東の遺跡に行つたんですよね」

「そこにお宝があつたんですか？」

「ばか、さっきお頭言つてたろ。見つけれなかったって」

「おいおい、そんなに何度も言うことないだろ？」

あーだこーだ、と男たちは物議をかもしながら進むと、薄暗い密林の間から日の光が差し込んでくる。

どうやら密林もここまでのようだ。もう少し進むと森を抜けて、一同の前に大きな山が見えてきた。地面にはごろごろとした岩が多く、足場が覚束ない。

「じゃあ、その男が持ってた地図。それを船長室で見つけたってことですか？」

「そうだ、今はベックマンに預けて調査して貰ってるからな」

「それで、その後はどうなったんですか？」

「もう話はお終いだよ。あいつが調査を頑張ってるんだ。俺たちは現地調査をするぞ、頂上で話を話してやるからさ」

シャンクスは、そう言つと目の前に聳え立つ火山を見上げた。斜面の角度は急で、歩いて進む道はもちろんない。ロープはあるものの、1つ間違えれば命がけなロッククライミングになりそうだ。

「おい、お頭。さっきまで何話してたんだ？」

先遣隊の最後尾であるヤソップが森から抜けてきたようだ。ここまでの道中、けが人も遭難も出ていないようだ。愛用の銃を肩にかけ近寄ってくる仲間に、にっこり笑う。

「いや、大したことじゃないさ。ちよつと、昔話をしたただけだよ」

神殿と神話

「おい、ザナンザ。そろそろ手え離せよ、腕が痛いじゃないか！」

「駄目だ。手を離れたら最後、北に向かって疾走する腹積もりだろ」
「なっ、なんで分かったんだ」

「馬鹿だな、シャンクス。顔にそう書いてあるぞ」

なに、と奇声を上げながら赤髪の男は？まれてない腕で必死に顔をゴシゴシとこすりだす。まるで猫が毛づくろいをしているようだなと思いつつ、俺は真っ直ぐ東の遺跡へと急ぐ。

どうせそんなことだろうと思ったただけだったが、まさか本当に逃げようと考えていたとは。

ぬかるみが多くなってきた地面に足が軽く沈む。歩きずらい道が拍車をかけたように、俺はイライラしながら進んでいた。

まだ後ろで文句を言うのを無視しながら、シャンクスのことを考える。腕がたち、喧嘩も強い。海賊として相当の修羅場を超えて来たのだろうことは、先の戦闘や航海で確信していた。まだ若い、海賊頭だというのも頷ける実力を備えている。

だが、どうも普段の彼はそんな恐ろしさを感じさせない。自分が今まで見てきた海賊とは、イメージが違いすぎて困惑する。実力や技術を取っ払ってしまえば、だたの悪戯好きな青年というのがシャンクスに対する正直な感想だった。

「なあ、もう逃げないからさ。腕離せよ、自分で歩ける」

振り返れば、頬を膨らませて睨み付ける目と合う。先ほど強く擦ったせいか、両頬は赤くなっている。

「本当か？」

「当たり前だろう。仕方ないからお前に付き合ってやる。だから、お前の用事が済んだら俺にも付き合ってもらっぜ」

どうやらこの男は俺に譲歩してくれる、ということらしい。？んだ
ままだった彼の腕を放すと、男はせいせいしたとばかりにブンブン
と腕を回す。

「なんだ、本当に逃げないんだな」

「何だよ、その顔は。さつき約束したろ、先にそっちに行つてやる
つて」

「海賊なのにか？」

「そつだよ、悪いか。俺は仲間や友達を裏切らないし、嘘もつかない
海賊なんだよ」

だから、安心しろよ。笑うシャンクスを見ていられなくて、不自然
にならない程度に視線を逸らすと前を向きなおして先に進む。

「…おい、ザナンザ。そつちは駄目だ、行くな」

不意にシャンクスに声を掛けられ、俺は怪訝な顔をしながら振り向
いた。

「シャンクス、一体今度は何なんだ。俺に付き合うんじゃないのか？」

「聞けよ、そつちは良くない。回り道をしよう」

赤髪の男はさつきまで浮べていた笑顔とは違い、真剣な表情でこち
らを見つめていた。だが、俺には彼の真意は理解出来なかった。

止める男の声を適当に振り切つて、進もう一步踏み出した足は地に
付くことはなかった。

「ザナンザ！」

シャンクスの大声が聞こえる。視界が反転して、体に大きな衝撃と
痛みが走った。自分の状況を把握することも叶わず、意識が朦朧と
していくのが辛うじてわかったただけだった。

冷たい感覚に、はっと目が覚める。目の前には、青空が広がってい
た。体を起こそうと力をいれた腕や足が、ゴフッと音を立てて沈む。

「俺は、崖から落ちたのか・・・」

俺が転がり落ちたのだらう崖を眺めながら、ぼんやりと状況分析をし始めた。あちこちをぶつけたようだが、骨に異常はなさそうだ。それが唯一の救いではあるが、とんだヘマをしたようだ。

しかも最悪なことに、俺が落ちた先は泥沼だ。どうにか這い上がるうともがくが、腰まで泥に埋まっていて起き上がるどころか体がどんどん沈んでいく。

（どうやら、底なし沼みたいだな……）

さすがの俺もこれは参った。気を失っている間にここまで埋まってしまい自分ではどうすることも出来ない。口に入った砂をぷつと吐き捨てて、ゆっくりと体が沈みずらい体制をとる。

「シャンクスの助けを待つしかない、か……」

さつき俺に、これ以上進むなと忠告してくれていた赤髪の男を思い出す。

彼はこうなることが分かっていたから、止めてくれていただろう。

シャンクスの言うとおり、彼の感を侮ってはいけなかった。

「俺を助けに、来てくれるのだろうか」

忠告を煩わしく思い振り切って、聞く耳を持たなかった自分を果たして彼は追ってきてくれるのだろうか。

少なくとも、今までの俺だったら助けようだなんて考えないだろう。

宝の場所はもう知られている。そうなればシャンクスにとって協力者なんて、宝の分け前が減るだけの厄介者に過ぎない。丁度いいとばかりに見殺しにすれば、宝は独り占めに出来る筈だ。

そうしている間にも、俺は沼へと沈んでいく。腰からずぶずぶと腹まで沼に飲み込まれ、もうすぐで胸まで沈んでしまうだろう。こうなれば、シャンクスが来た所で助からない。

「くそつ。身から出た錆だな、今までの行いが悪かったせいだ」
でも、可能ならもう一度……。

「おい、大丈夫か？」

どうしたのだろう、まだ死んではいないのにシャンクスの声がある。

「よかった、まだ沈みきっていないみたいだな」

茂みから赤い頭がひょっこりと顔をだす。

「仕様がないうだな。だから言っただろ、回り道しようって」

嬉しそうにそう言っていると、俺が嵌っている場所まで石伝いに飛び移りながらやってくる。

「おい、どうしたよ。生きてるか？」

ぺちぺちとまだ沈んでいない顔をシャンクスが叩く。

「まさか、本物か」

「なんだよ、死に掛けて頭でもやられたか？ ほら、今助けるからな」

さつと差し出される掌に、俺は慌てた。ジャブつと泥水が跳ね散り、シャンクスにかかったが気に留めることなく腕をさらに伸ばす。

「止める、さすがに男1人を引き上げるのは不可能だ」

「大丈夫だ、俺見かけによらず力はあるんだぜ。ほら、手を伸ばせよ」

「下手をしたら、お前も沈むぞ」

「いや、お前は助かる。それに、俺は沈まない。信じろって」

不思議だ、何の根拠もないシャンクスの自信を信じられる気がしてくる。泥水の中に沈む前の手をそつと差し出せば、すぐさま男に？ まれた。しっかりと俺も男の手を握り返すと、驚いたことにどんな体が浮上していく。

（なんて馬鹿力なんだ）

口をぽかんと開けたまま目の前の男を眺める。成人男性の体重と泥濘にはまった抵抗もプラスして相当重はずなのに、シャンクスは何てことはないと言った感じで俺を引き上げていった。

「何で俺を助けたんだ？」

「何だよ、あのまま沼に埋まったほうがよかったのかよ。案外お前ってマゾなんだな」

「俺を助けたって、何の得にならないだろう?」

俺を見捨てればよかったんだ。そう呟く俺に、シャンクスは困ったように頭をかきながらボソボソと話し始めた。

「仕方ないだろう、これが俺の性分なんだ。困った奴がいてさ、そいつが気に入った奴だと見捨てられない」

「……そうか」

何も言わず俯いてしまった俺を、ちらちらとシャンクスが盗み見をしてくる。その視線に気づきながらも、俺は顔を合わせることなく地面を見つめる。何か言おう、と思ったが止めにした。

「礼がまだだったな。ありがとう」

俺は立ち上がり、そう男に言った。突然のことにびつくりしたシャンクスがぱちぱちと瞬きをしていたが、男も立ち上がると腹を抱えながら笑って俺の肩を叩いた。何度も叩いてきた。あの馬鹿力で叩かれ痛かったが、それを口にするのは男の沽券に関わる。代わりに言うては難だが、俺は笑われたことにむっとしていると、笑いすぎて涙目になった男と目が合う。

「そう怒るなって。気にするなよ」

再び道なき道をおるいていると、明るい光が見えてくる。密林ばかりを歩いてきたが、もうすぐで終わりのようだ。2人で足早に森を抜けると、空はもう茜色であった。今まで来た道を振り返り西の空に太陽が今まさに沈もうとしている。

「何とか日没前に到着できそうだな」

俺は開けた草原を歩いて、目的地である島の遺跡を探す。すると、大きな柱が目にとまった。近づけばその柱は石柱であった。石の風化からして相当前のものだということが分かる。

「おい、ザナンザ! こっちに来てみるよ!」

「わかった、今行く!」

シャンクスに呼ばれた方へ行くと、赤髪を風に揺らして立ち尽くす男が見えてきた。俺もその隣に立ち、男の視線の先にあるものを見

つめる。

「すごいな、この遺跡」

「ああ」

そこには、巨大な三角錐状の石製の建物があった。その周りには俺が先程まで見ていた石柱が立っている。まるで、この建物を取り囲むように配置されていた。

「本当にすごいな。これ全部人の手で造ったんだろう、しかも大昔のこの連中がさ」

「そうだ、誰にも真似できないような建物を建てる。その建物を壊れたいと思い、それを造らせた人間を凄く思う。それが権力に変わるんだ」

赤髪の男は黙って遺跡に近づいていく。手のひらで建物を壁を触れながら、ゆっくりと回りながら進む。

「ここ、何か彫ってあるな。ザナンザ、分かるか？」

「確かに、これは人だな。2人いる。…戦士だったのか、2人とも剣を持ってる」

「こっちにも彫ってあるぜ」

いつの間にか建物の裏側に回ったのか、シャンクスは壁からひよっこり顔を出している。どうやら人が見える高さだけに模様が彫っているようだ。俺は見逃した模様はないか、と注意深く観察しながらシャンクスがいる所まで移動する。

「そっちには何が描かれているんだ？」

「うーん、人が2人…いや1人かな。この変な頭をした奴に殺されてる」

古代遺跡だけに、中々描写が過激なんだろうと思いつながら俺も同じ模様を見つめる。

「ほら、こいつが血を流して倒れてるように見えるだろ？ きつと

こいつが犯人だね、間違いない」

ビシビシッとシャンクスの指に突付かれた壁画の中の男を見つめる。壁画の中心に描かれたその男は、別の壁画の男とは違う容姿で描か

れていた。手足が長く、体を布で覆い、頭にはシャンクスの言ったとおりおかしなものが生えているようだった。その変な男の下に、転がされたように人が倒れている。

「なるほど、この変な男にもう1人が殺された場面なんだな」

「だろ。それにしてもどつかで覚えがあるシーンなんだよな」

腕を組んでふむ、と考え込んだシャンクスを横目に俺も考える。もしかすると、俺の考えが間違えてなければだ。

「それは多分、……あの神話だ」

「ああ！」

どうやらそれだけは、シャンクスの記憶に残っているようで安心する。昨日の寝ずの講義がここにきてようやく効果を発揮してくれたようだ。感慨深い気持ちでしみじみと俺はもう一度壁画を眺めた。

「確か、闇の王を2人の男が倒そうとしたけど、結局闇の王は自滅したっていうしょうもない話だったよな」

「すまない、どうやら感動した俺が馬鹿だったようだ」

「あれ、おかしいな。違った？」

おかしいのはお前の頭だ、と心の中で悪態をつくと目の前の壁画を指でなぞりながら説明を始める。

「昔、闇の王がこの地を支配していた時、1人の男が王によって殺されてしまった。その男の死体は闇の王によって地下世界へと引き込まれてしまう」

「それが、この壁画って訳だな」

俺は話の続きにあたる壁画を探すため、別の側面へと移動する。遺跡自体の高さはかなりあるが、周囲の長さはそう距離はなく、すぐ目当ての場面が描かれた場所へと移動できた。

「これが続きだな」

「ああ、しばらくして再び闇の王によって2人の男が狙われた。一説によると、この2人の男は以前殺された男の息子であるとも考えられている」

そして闇の王に狙われた二人の男は、剣を持ち闇の王に立ち向かう。

俺たちはどんどん壁画を読み進めていく。

「そうそう、この男たちには特殊能力があるんだよな」

「そうだ、2人とも不老不死だという話なんだが、困ったな」

シャンクスが続きをせっつかれるが、俺はこれ以上続けることができなかった。

シャンクスが続きをせっつかれるが、俺はこれ以上続けることができなかった。待ちきれず首をかしげた男に覗き込まれ、俺は重い口を開いた。

「続きが描かれていないんだ」

「まじかよ、何だよそれ！」

「それが残念なことに、本当なんだ」

本当に続きがないか探すシャンクスの傍らで、俺は深く考え込む。壁画に描かれた物語は、2人の男が闇の王へと立ち向かう場面で終わっている。

どういう意味なのだろう、もしかしたら俺は思い違いをしているのだろうか。ここにこの王朝文明の墓があると踏んで来たが、入り口も見当たらない。いや、確かにここが宝の在り処だとして、この不自然に途切れた壁画に秘密があるのかもしれない。

「おい、ザナンザ」

シャンクスに呼ばれて俺は、はっと思考の海から帰ってくる。

「どうした？」

「もう日が暮れる。そろそろ夜を過ごす準備をしないか。宝探しはまた明日にしようぜ？」

言われた通り、すっかり日が暮れて辺りも暗くなっていた。熱帯地帯とはいえ、夜は冷える。

宝は目の前、という所まで来て悔しくない訳ではなかったがこれ以上の散策は不可能だろう。日の光がなくなり、もう壁画を見ることが出来なくなってきた。

俺は目の前の壁に拳を叩きつけたため息をついた後、シャンクスに倣い焚き火の枝を探しに森の方へと歩いていった。

神殿と神話（後書き）

いつも閲覧して下さっている方、ありがとうございます。
ただらたとしてしまった感がありますが、ようやく半分です。
よろしければ、お付き合い頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1444y/>

昔の男

2011年12月13日00時53分発行